

エミリ・ディキンソンの詩「私の後ろに永遠が沈む」

黙示録的幻影

嶋田 美恵子

〔抄録〕

エミリ・ディキンソンの詩「私の後ろに永遠が沈む」には、復活、審判、イエス・キリスト、救済などという語はひとつもない。しかし、詩に用いられている幾つかの語は、具体的な事物を指示しながら、且つ多くの意味を内包している。また、海の三日月や空の渦巻きは、事実を描写したものではありえない。それらは詩人の思想を象徴的に表わしたものである。本論文はそのような語、語句の象徴的な意味を探ることによって、この詩全体の意味を明らかにすることを試みたものである。この詩の手法とテーマは、象徴や寓意によってキリストの再臨を描いた『ヨハネの黙示録』のそれらと似ている。そして、この詩の内容は、ディキンソンが見た死後の魂に関する黙示録的な幻影であるという結論に達した。

キーワード：死，復活，渦巻，三日月

・序論

私の後ろに永遠が沈む (Behind Me – dips Eternity –) という行で始まるエミリ・ディキンソン (Emily Dickinson 1830-1886) の詩は、三つの六行連から成る詩である。最初に詩人は太陽の比喩を用いて復活のイメージを提示し、次に神の国について述べる。この詩がそこで終わっていたのであれば、はるかに単純でわかりやすくなっていたはずである。しかし、詩人は最後に、海の中に三日月を、空には大渦巻を持ってきた。その異常な現象は、混沌のイメージを醸し出し、詩の理解を難しくする。本論文は、この不可思議で難解な詩を、聖書の『ヨハネの黙示録』のイメージを以って読み解こうとするものである。

ディキンソンは多くの詩や手紙において、聖書の引用、言及をしばしばしているが、Jack L. Cappsによると、聖書の中でも『福音書』、『ヨハネの黙示録』、『創世記』が最も多く引用されている¹⁾。『ヨハネの黙示録』は、この世の終末に審判があり、苦難を乗り越えてきた信仰者

達が救われ、神の国において神の支配が実現することを象徴的に物語っている。すなわち、メシアの再臨と救済が、ヨハネが見た幻という形で描かれている。ディキンソンのこの詩は彼女が見た黙示録的な幻影であることを、そしてその幻影とはどのようなものであるのかを、詩に用いられている個々の単語や句から、その象徴的な意味、暗示を読み取ることによって明かにしたい。

・復活そして神の国

太陽は毎朝東から昇り、夕べには西に沈み、翌日また東から昇って来る。そして、太陽はその光と熱とによって、地球上の我々に生命を与える源泉となっている。そのような太陽を多くの民族が、神、神に近いもの、或いは神の顕現と見なした。太陽が西のかなたに消えて夜の闇を招く日没は、太陽の死と考えられ、東から再び太陽が現われる日の出は、復活再生と考えられた。すなわち、復活再生を繰り返す永遠不滅の太陽というイメージは、様々な神話の原型的なイメージとなっている。Northrop Fryeは*Anatomy of Criticism*において、神話というのは、物語の観点からすると、願望の極限にある行動を模倣したものである²⁾、と言ったが、太陽の神話は永遠の生命と靈魂の不滅に対する人間の強い欲求から創られたものである、と行うことができる。

エミリ・ディキンソンは、永遠と不滅に対する願望を多くの詩の中でうたった。Thomas H. Johnson版の詩集では、永遠 (eternity, eternities, eternity's) という語は52篇、不滅 (immortality) は42篇の詩の中で使われている。「私の後ろに永遠が沈む」もそのひとつである。

Behind Me – dips Eternity –
Before Me – Immortality –
Myself – the Term between –
Death but the Drift of Eastern Gray,
Dissolving into Dawn away,
Before the West begin – (No.721 第一連)

私の後ろに永遠が沈む
私の前には不滅
私自身はその間の期間
東の灰色の漂流物にすぎない死は
西が始まる前に

夜明けの中にとけて消える

“Dip” 沈む とは、太陽が沈んで見えなくなることを意味する。また、“dip”には液体にちょっと浸してまた出すという意味もあることから、“dip”という語を用いることによって、太陽が海のかなたの地平線に沈み、再び昇るということを暗示しているとも考えられる。永遠が沈む とは 太陽が沈む の比喻表現である。太陽が沈む方向は 西 であるから、私の後ろとは 西 の方向ということになり、私 は東の方を前にしている。『旧約聖書』がヘブル語から英訳及び和訳された時、ヘブル語の複数の語が“west” 西 と訳されたが、『聖書辞典』によると、「西と訳されたヘブル語 アーホール の字義は 後方 」³⁾である。同様に、ヘブル語の ケテム は 東 と訳されたが、それは 前 を意味するという⁴⁾。日の出の方向、すなわち東が 前 であり、日没の方向、西は 後ろ ということになる。古代ヘブル人が方向確認の際に、太陽が昇る方向を前にしたように、ディキンソンもこの詩では東を前にしているのである。

私 の後ろ、すなわち西に沈む太陽は、私 の前方である東から再び現われる。この日の出は 復活 という概念で捉えられ、死から再生、復活を繰り返す太陽には終わりの時がなく、それは 永遠 (Eternity) である。永遠なる太陽には 死 というものがない。すなわち 不滅 (Immortality) である。日没と日の出が太陽の死と再生と見なされるイメージは、前述したように神話の原型的なイメージである。朝、昼、晩という一日の変化は、太陽の復活、生、死というサイクルによって引き起こされると考えられ、その永遠不滅の太陽のイメージは、永遠の生命、魂の不滅に対する人間の願望の中に取り入れられたのである。

すなわち、ディキンソンのこの詩の第一連における太陽のイメージは、神話の原型的なイメージであって、キリスト教に限定されるものではない。しかし、キリスト教においては、太陽は神によって創造されるものであり、神は太陽を思いのままにすることができると考えられ、太陽が太陽神として崇拜されることはない。そして不滅の靈魂、永遠の命は、ギリシャ思想における靈魂不滅説、すなわち人間の靈魂はもともと不滅であり、死によって靈魂は肉体という牢獄から自由になるのであるという思想、とは異なり、キリスト教では魂を持つ身体が不滅の靈の身体となって復活し、永遠の命はキリストを信じる者に与えられるものであるとされる。そのような 復活 はキリスト教徒にとっては信仰の基盤とも言えるものであり、希望を与えるその中心的なものである。そして、詩の第二連ではキリスト教の教義が述べられるのであるが、第一連はまず、神話の原型イメージを提示することから始められた。

第一連のペルソナ 私 は、永遠と不滅の間にいる。そこは太陽が沈む西と太陽が昇る東との間、死と復活の間である。 期間 を意味する“term”には、 刑期 という意味もある。したがってE. Miller Budickは、時間というものは紛れもなく拘禁刑の刑期であり、永遠と不滅の間で人を捕われの身にしておくのだ⁵⁾、と言っている。聖書においては、時間を超越しているの

は神だけであり、時間は神の業であるとされている。神の被造物である人間は時間を超越することはできない。比喩的に言えば、人間は時間という牢に捕われているというBudickの表現となる。誕生と死の狭間にあるこの世の人の生存期間は短い。神から見れば、人間の一生は一息のよう⁶⁾だと聖書は言い、神の永遠性が強調される。私 は永遠と不滅を両極としてその間にいるのであるから、今の 私 は永遠でも不滅でもない。そして、死を象徴する西を後ろにし、復活を象徴する東を前にしているということは、私 は死んで復活の方向を見ていることになる。

四行目の 東の灰色の漂流物 (the Drift of Eastern Gray) とは、夜が明ける前の薄明の中に漂う雲のことであり、死 とは暗黒の夜のことである。ディキンソンが好んで読んだと言われている『オーロラ・リー』(Aurora Leigh 1857)において、エリザベス・ブラウニング(Elizabeth Barrett Browning 1806-1861)が 朝が灰色の中で生気づく (the morning quicken in the grey)⁷⁾とうたったのも、暗黒の夜から次第に白んでいく夜明け前の東の空を 灰色 と 言ったのである。聖書的表現をすれば、闇が命と光に負ける⁸⁾、ということになる。ディキンソンはその様子を、死が夜明けの中に消えてしまうのだと言った。夜明けが近づくにつれて灰色の漂流物にすぎなくなった夜の残留物は、夜明けと共に消えて行く。太陽が昇る直前のこの情景こそ、『ヨハネの黙示録』におけるイエス・キリスト再臨の 時が近づいている⁹⁾という差し迫った状況を描写しているのである。その 時 が近ければ近いほど、この切迫感は強くなり、私 が居る 期間 (term) は短くなる。西が始まる (the West begin) とは、太陽のサイクルにおいて日没を意味する。この第一連では、死と復活の間にいる 私 の前方で、死が生へと、闇が光へと変わることが象徴的に述べられている。そして次の第二連では、キリスト教の信仰者に信じられている教義が提示される。

'Tis Kingdoms – afterward – they say –
In Perfect – pauseless Monarchy –
Whose Prince – is Son Of None –
Himself – His Dateless Dynasty –
Himself – Himself diversify –
In Duplicate divine – (No.721 第二連)

その後は神の国だと人は言う
完全な途切れることのない君主国において
その王子は誰の子でもない
彼自身が彼の永遠の王朝
彼自身が神の似姿となって

自分自身を様々に変化させる

“Afterward” その後 とは、第一連の一行目が意味する 太陽が西に沈んだ後 と考えることができ、また、第一連の四行目と五行目が意味する 死が夜明けの中に消えた後、 のことであるとも考えることができる。太陽が西に沈んだ後 というのは死後を意味する。その場合 神の国 とは、死人が復活した後に住む天国である。日没後であっても、神の国においては太陽は必要ではない。それは神が照らすからである、と『ヨハネの黙示録』は言う。その後 が 死が夜明けの中に消えた後 を意味する場合は、夜明けの後に出現する光の世界を、『ヨハネの黙示録』において述べられている新しいエルサレム、すなわち 神の国、 というイメージで捉えているのだと考えられる。

神の国 と訳した “kingdom” とは、王が統治する国である。“Kingdom” は日本語訳聖書では 御国 と訳されているが、英訳聖書における “kingdom” は具体的には、神の国 (the kingdom of God) 及び 天国 (the kingdom of heaven) と表わされている。神の国 と 天国 とは同義語であり、神によって統治支配される神の王国を意味する。神の国の到来は、イエスの教えの中心にあるものである。そして、それはキリスト教信仰者の究極の希望であり、主の祈り の中では 御国が来ますように¹⁰⁾ という言葉となっている。

第二連二行目の “Monarchy” は一行目の “kingdom” と同義である。『ヨハネの黙示録』は、神の国がキリストの再臨によって完成することを述べている。そして、『詩篇』では、神の国はとこしえの国であって、神の統治は代々に絶えることがない、と称えられている¹¹⁾。それを詩人の言葉にすると、その王国は完全に途切れることがない、となる。そして詩人は、神の国における王子は “Son of None” であるという。神の国の王子とは、イエスを指示する。新約聖書において、父としての神との関係及び人類に対する神の啓示が強調される際には、イエスは 神の子 (Son of God) と呼ばれている。また、イエス自身は自己の呼称として 人の子 (Son of Man) を使った。しかし詩人は、イエスは “Son of None” であると言う。“Son of None” に関して Fordyce R. Bennett は、詩人は旧約聖書のキリストの予表であるヨシュアをほのめかしている可能性があると言い、ヨシュアは “Non” または “Nun” の子で、その名前はエホバを意味し、その父の名前は 正午 (noon) または 永続 (perpetuity) を意味した、と言っている¹²⁾。Noneの子 とは Nunの子 であるヨシュアを暗示し、“nun” は “noon” の意味であり、ヨシュアはイエスの予表であると言うのである。

“None” が “non” 或いは “nun” と綴られ、それが “noon” を意味したことは英語史の中に見ることができる。“Noon” は中期英語では “none”、古英語では “non” であった。“Nun” との関連は “luncheon” の変化から知ることができる。『英米単語の歴史辞典』によると、“luncheon” の起源は中期英語の “nuncheon” であるという。そして “nuncheon” のもっと古い形は “noneschench” で、“none” は “noon” を意味したという¹³⁾。すなわち、“noon” に由

来する“none”は、“nun”と変化したのである。したがって、この線をたどって“Son of None”を“Son of Nun”へと導くこともできる。

聖書に表わされているヨシュアは、モーセの従者であったが、後にモーセの後継者として、イスラエルの指導者となった。そのヨシュアというヘブル語の名前は ヤーウェは救う という意味で、そのギリシャ語訳が イエス であった¹⁴⁾。このことから、ヨシュアは後の新約聖書に登場するイエス・キリストの前兆と考えられ、予表論の中に取り入れられたと思われる。また、研究社の『新英和大辞典第五版』によると、ヘブル語のアルファベットでは“nun”^{ヌーン}の原義は“? fish”である、とクエスチョンマーク付きで 魚 であった可能性を提示している。キリスト教美術では、魚がキリストを象徴することがある。それはギリシャ語の イエス・キリスト・神の・子・救世主 の最初の文字をつなぐと 魚 を意味するからである¹⁵⁾。この線からも“nun”はイエス・キリストに行き着くことはできる。

ディキンソンが“Son of None”によって予表論を述べ、その意味が“none”の語源やヘブル語にまで及ぶことを意識していたかどいいうかはわからない。しかし、我々は更に異なった意味で“Son of None”を理解することができる。上記の詩の日本語訳では、“none”をそのまま英語の“no one”の意味にとり、“Son of None”を 誰の子でもない としたが、それは、ディキンソンは第二連で三位一体の教義を提示しているのである、という考えに基づくものである。三位一体の教義とは、父なる神と、子なるキリストと、聖霊、という三つの位格が一体をなし、それはひとつの神であるということである。キリストも聖霊も神である。すなわち、イエスは神であり、父であり子であり聖霊であるということである。この三位一体の観点からすれば、当然イエス・キリストは 誰の子でもない のである。

神が永遠であれば、神が支配するその王国も永遠である。それは時間を超越している(dateless)ということになる。そして、イエスが神のかたちに似たものとなるということは、聖書の言葉で言えば、ひとり子なる神だけが神をあらわした¹⁶⁾ということになる。また聖書において、パウロはキリストの姿のことを 神のかたちである¹⁷⁾と言っている。だれもこの世で神を見ることはできないために、神はキリストの形をとって自らを知らせるのである。また、神がさまざまに自身を変化させるといのは、聖書では、受肉したキリストは神の栄光によって変容し、聖霊は鳩のように¹⁸⁾、或いは、火の舌のような形¹⁹⁾で天から下ってきた、と表わされている。更に神は 雲の柱²⁰⁾、火の柱²¹⁾、かみなりと、いなずまと厚い雲²²⁾などという しるし となって現われる。神はさまざまなかたちとなって、その栄光を示すのである。このようにディキンソンは詩の第二連において、神と子と聖霊について三位一体の教義を示したと考えられる。

しかしここで、第二連の最初の行に用いられている“they say”という言葉に注目したい。“They”とは、漠然と 人々 を指し、“they say ~”は ~という噂だ という意味である。すなわち、私 はそのような話を耳にしたり読んだことがある、という意味であって、私

がそれを信じているとは言っていない。第二連に書かれていることは、人が言っていることであって、私の信条を私の言葉で語っているのではない。この世に生存している人は、誰も死後の世界を経験してはいないのであるから、それに関する知識は書物や他人から与えられるものであることは当然であるが、霊の世界を信じることこそ、信仰というものであろう。信仰とは、望んでいる事からを確信し、まだ見ていない事実を確認することである²³⁾と聖書は言う。しかし、敢えてここに“they say”を挿入した詩人の意図は、私の懐疑心をほのめかすことにあったと思われる。

懐疑心とは、ディキンソンが861番の詩 雲雀を引き裂いてごらんなさい。そしたら音楽を見つけてでしょう (Split the Lark – and you’ll find the Music –)に登場させた 疑い深いトマス (Sceptic Thomas) のものと同じである。その詩の中で、詩人はトマスに対して、雲雀の鳴き声が真実のものであることは、雲雀を引き裂いてみれば信じるのか、と問いかける。トマスは、聖書に登場するイエスの12人の弟子の一人で、彼はイエスの復活の話を聞いても、自分の目でイエスの姿を見るまでは信じなかった。私もまたトマスと同様に懐疑心を持っており、神の国の到来や、三位一体の教義に対する疑いを払拭できない。自分の信じる教義について述べるのであるならば、たとえそれが人から聞いた話であっても、“they say”という言葉を入れようという心理は働かないであろう。そして、もしそのような教義が真実であるとするならば、という心情が次の連の一行目の それなら (then) という語に現われていると思われる。

・エミリの黙示録

'Tis Miracle before Me – then –
 'Tis Miracle behind – between –
 A Crescent in the Sea –
 With Midnight to the North of Her –
 And Midnight to the South of Her –
 And Maelstrom – in the Sky – (No.721 第三連)

それなら私の前は奇跡です
 私のうしろは奇跡です
 その間には海の中に三日月
 その北には真夜中が
 その南には真夜中が
 そして空には大渦巻がある

私 の後ろには永遠、前には不滅、復活の後は神の国、そして、神の子イエス・キリストは父であり聖霊であり、みなひとつの神である。そういうことであるならば、私 の前も後ろも、死も復活も 奇跡 でしかない。奇跡 に対するディキンソンの考えは、他の詩から推察することができる。ディキンソンは、自然界の現象や動植物の生態に対して感嘆と畏敬の念をもって、それらを多くの詩の中でうたった。例えば、夏に繰り広げられる自然界の光景を夏の奇跡と呼び²⁴⁾、小鳥のうたもまた奇跡であると言う²⁵⁾。死 もまた奇跡である²⁶⁾。そして、臨終なしで死ぬこと、そして生命なしで生きること (To die – without the Dying/ And live – without the life) も奇跡である²⁷⁾、と彼女は言っている。最後のものは本論で扱っている詩のテーマである不滅の魂に言及している。

奇跡 とは、超自然的で不思議な出来事を意味し、聖書において 奇跡 を表わすより明細な表現は、イエスが栄光を現わすために行なった しるし ²⁸⁾であり、また、神の くすしきみわざ ²⁹⁾である。トマス・ペイン (Thomas Paine 1737-1809) は、『理性の時代』において、奇跡の説話は、その宗教体系が こしらえごとである徴候と考えられるべき ³⁰⁾であり、神秘とか奇跡などは 真正なる宗教ではなくて、こしらえものの宗教に属する添えものである ³¹⁾と、理神論者らしい見解を述べている。ディキンソンもそのような考えを持っていたと考えるならば、奇跡 という言葉はアイロニーとして用いられたことになる。しかし、彼女の他の10篇の詩の中で用いられた“miracle”は、不思議な出来事に対する畏敬と驚嘆の気持ちを表わす言葉として、きわめて素直に、且つ単純に用いられている。この詩においても、奇跡 に対してペインのような否定的、批判的な意図はないと思われる。

その間には海の中に三日月 (–between– / A Crescent in the Sea –)の その間 とは、第一連で述べられている 私 がいる永遠と不滅の間の 期間 のことである。そこは 海 であるという。海 は、生命の源であると同時に、荒れ狂ってすべてを飲み込んでしまうという 死 のイメージでもある。また、海 は人が航海して渡っていく人生、世界、そして死後の魂が越える場として比喩的に用いられる。ディキンソンの詩において 海 は、例えば、4番の詩 この不思議な海の上を/ 音を立てずに航海している (On this wondrous sea/ Sailing silently,) や、30番の詩 漂っている! 漂っている小船よ! (Adrift! A little boat adrift!) においては、海は死後の魂が現世から天国へと渡っていく場として捉えられている。また、643番の詩 私は彼にとって十分だとわかっていた (I could suffice for Him, I knew) では、ペルソナが海の立場に立つ。

海の中の 三日月 とは、いったい何を意味するのかについて考察する前に、海 と 月 との関係について述べたい。海には潮汐があるが、それは月の引力の影響によるものである。ディキンソンは、海の潮の干満が月によって支配されていることを、次のように表している。643番の詩では、月の動きに対する/ 海の答え/ 海の潮汐は月に順応する (The Answer of

the Sea unto / The Motion of the Moon – / Herself adjust Her Tides – unto –) と言い、429番の詩では、月は 少年のように柔順な海を導く (She leads Him – docile as a Boy –) と言う。ディキンソンの頭の中には、海の潮汐という自然現象の背後には、月の力が働いているという科学知識があり、彼女はそれを詩に表わしていたのである。その 月 は721番の詩では “moon” ではなく、三日月 (crescent) となっている。

地球上から見ると月は満ち欠けをしているが、三日月 と呼ばれる形の月は、新月と満月の間の期間にあり、新月の三日前と三日後に現われる。形容詞の “crescent” には 次第に増大する という意味がある。一般に三日月は、次第に満ちて行って上弦の月となり、満月となる、新月の三日後の月を意味すると考えられる。ディキンソンも、例えば508番の詩 私は譲りました - 私は彼らのものであることをやめました (I'm ceded – I've stopped being Theirs –) において、未完成の状態から完成した状態へと成長することを、三日月 から 存在の完全な弧への変化として捉えている。満月が月の完全な形であるのに対して、三日月 は月の不完全な形を呈しているからである。月の満ち欠けは、月が新月となった後再び生まれ変わって満月になる、その循環の中における死と再生を象徴している。

海 が死後に魂が渡る場であり、三日月 が死と再生の循環の中での不完全な状態を象徴しているとするならば、また、海 が神の国が到来する前の世界に居る 私 の場を象徴しているとするならば、海の中の三日月 とは、まだ復活していない、或いはまだ救済されていない 私 の魂を照らす不完全な月の薄明かりということになる。弱い光でも、闇の中の光は希望を与える力を持っている。三日月の光はやがて満月として完成するという希望を与える光でもある。聖書では光は神であり、海の潮の満ち干を支配する月は神の支配下にある。

海 と 三日月 のそれぞれのイメージを上記のように捉えたとしても、何故 三日月 が空にではなく海にあるのか、という問題が残っている。天にある三日月が反射して海に映っているというのであれば、三日月そのものは天にあるはずである。しかし、この詩においては、三日月は天にはなく、海の中にある。上の天にあるはずの三日月が下の海の中にあるということは、三日月が天から下へ降りて来たことになる。聖書には 三日月 (crescent) という言葉はないが、三日月 が天から降りてくる絵は、キリスト敎美術には見られる。その三日月には、聖母マリアが乗っている。聖母マリアが三日月の上に乗って、天上から降りて来る絵は、『無原罪の御孕り』と呼ばれるものである。『無原罪の御孕り』とは、マリアが崇拜される過程でできた、マリアが誕生において無原罪である、という教義に基づくものである。『無原罪の御孕り』の絵画の中のマリアは、三日月の上で太陽の光に輝き、その頭上には星の冠が輝いているのが通例である。それは、『ヨハネの黙示録』を源泉としている。そこには ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた という 大いなる天のしるしのひとつの現われとして記されている³²⁾。『被昇天』のマリアを描いた宗教画においては、マリアは天上へと昇っていく。そして、その後のマリアは王冠を戴いた女王として描かれる。矢崎

美盛著の『アヴェ・マリア』によると、キリスト教美術において 聖母マリアは一般に赤い着物を着て青いマントを着けるのが、彩画上の原則³³⁾であるが、復活と昇天の際のマリアは、原則的に白い着物を着て描かれているという³⁴⁾。エミリ・ディキンソンが、復活と昇天の時のマリアと同様に、『ヨハネの黙示録』で象徴的に用いられている色、白色の服を身に着け、詩の中ではしばしばペルソナ 私 を 女王 と称し、性的イメジャリーによって天の結婚を暗示したことなどから、ディキンソンは自分をマリアと同一視する傾向があったかに思わせる。天からマリアが乗って降りて来る三日月を海の中に置き、海の星 という称号を持つマリアを、海の三日月 と表わしたのであるならば、そこにはマリアに対するディキンソンの願望が内包されていると考えることができる。

また、三日月 が持つ鎌の形に注目すると、三日月 は前述した『オーローラ・リー』の一節を想起させる。それは、月は小さくなって曲線のようになり、最後にはこの世の人々を刈り取るために降りて来る神の手のための鎌のようになった³⁵⁾、というものである。これは 雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると地のものが刈り取られた³⁶⁾、という『ヨハネの黙示録』の記述に由来する。その記述は少し後の^{みづかい} 御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ³⁷⁾、そして、その酒ぶねが踏まれると血が流れ出た³⁸⁾、という言葉へと続く。更に、イエス・キリストは 血染めの衣³⁹⁾をまとしてヨハネの幻の中に現われ、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む⁴⁰⁾のであると言う。このように、刈り取られたぶどうは酒ぶねの中で踏まれ、絞られる。また、鎌によって刈り取られた穀物は、脱穀され、もみをふるい分けられる。すなわち、鎌による 刈り入れ は神の 裁き の比喩として用いられている。このことから鎌の形をしている 三日月 は、神の 裁き を象徴すると考えられる。裁き は次に述べる 大渦巻き と関連がある。

海の潮の干満が月に支配されていることは述べたが、渦流は潮の満ち干の最も大きい時、すなわち大潮の時にできる潮の落差のよって引き起こされる。詩の最終行にある“Maelstrom”とは、ノルウェーの北西海岸沖に起こり、渦が作る巨大な円の中心へとすべての船を吸い込んで破壊すると考えられていた 大渦巻 を意味する。その大渦巻についてはエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe 1809-49) が、*A Descent into the Maelstrom*において、船が大渦巻に巻き込まれていき、その中で人間が死と戦う様子を克明に語っている。ディキンソンは手紙の中で、ポーについてはほとんど知らないと言っているが⁴¹⁾、Jack L. Cappsは彼女は1850年に出版されたポーの本を一冊読んだであろう、と言っている⁴²⁾。またJudith Farrは、大渦巻きと真夜中、海の中の三日月などは、ハドソン・リヴァー派の風景画に見ることができると言い、Thomas Cole (1801-1848)、Frederic E. Church (1826-1900)、Martin Heade (1819-1904)の作品を挙げている⁴³⁾。ディキンソンは他に四篇の詩において“maelstrom”という語を用い、502番の詩 少なくとも祈ることは残っている、残っている (At least – to pray – is left – is left –)

においては、イエス・キリストが海に大渦巻きを起こすのだと言っている。彼女は書物や絵画を通して、大渦巻きについての知識は持っていたのであろう。

ディキンソンがこの詩の最後に登場させた大渦巻は空にあることから、渦巻に巻き込まれたものは空へと引き上げられることになる。すなわち、空の大渦巻は 上昇 の意味を持つ。そして、その渦が作る螺旋形にも象徴的な意味がある。上昇 を螺旋のイメージでとらえることは、ダンテの『煉獄篇』からエリオット、イェイツ、パウンドの螺旋階段に至る文学に広く見られる象徴的なパターン である、とノースロップ・フライは言う⁴⁴⁾。ディキンソンの渦巻の象徴もそのような原型的なパターンの中に含まれることになる。また、マンフレート・ルルカー (Manfred Lurker) は、『象徴としての円』において、環状の波の中にもぐる人間は黄泉の国の深みへ降り立ち、渦に巻かれながら新しい生へと復活する⁴⁵⁾と述べている。そして、黄泉の国についてよく知られたその象徴は 迷宮 であり、形態的にも意味的にも類似関係にある螺旋 は死と生を暗示すると言う⁴⁶⁾。すなわち、螺旋は死後の魂の旅路を象徴するものである。ディキンソンの詩は、魂が巨大なエネルギーによって螺旋状に流され、その中心へと上昇し、吸い込まれていくのだと言っているのだと考えられる。中心へと到達することのできる者は、選ばれた者だけであるとするならば、途上においてその審判が行なわれることになる。『ヨハネの黙示録』には最後の審判について書かれているが、矢内原忠雄氏は「ヨハネ黙示録講義」の中で、神の審判は 三度の旋回運動を以って絶頂に達する と言い、七つの封印、七つのラッパ、七つの鉢という七つの禍害を一連とする三回の旋回を以って上昇するのだと述べている⁴⁷⁾。すなわち、螺旋は神の審判を象徴する。以上のことから考えると、ディキンソンの詩は、魂が上昇して神のもとへ回帰することを象徴的に 空の渦巻 というイメージで表わしたものであるとすることができる。

しかしながら、ただ単に天への上昇によって神への回帰を言うのであるならば、海に起こる大渦巻 を空に起こさなくても、預言者エリヤを天へと引き上げた つむじ風⁴⁸⁾を使うこともできた。空と海は『創世記』では、神の天地創造の際に水が上の水と下の水に分かれてできたものとされている。ディキンソンが 海 という時、空 を意味する場合もあり、この詩においても 天の海 というイメージがあると考えられることは可能である。その場合、空の大渦巻は天の海に起こったことになる。しかし、月が海の中にあり、渦巻が空にあるということは、一般には、天地の一部がひっくり返って大混乱を起こし、カオスの状態にあることを意味する。詩人はこのような天地の異常現象によって、終末のイメージを示したのであろう。また、神に対する畏怖の念、死後に向かったの不安、現世の精神的苦悶や、完全には拭い去ってしまうことのできない懐疑心などが渾然一体となった詩人の心理状態が、カオスのようなイメージを作ったのであろうと考えることもできる。

東は不滅、西は永遠、上には大渦巻、下には海の中に三日月、南北は共に真夜中である。私は前後左右上下をそのようなもので取り囲まれている。神の国には夜はない。まだ神の国に到

達していない 私 のいる場所は夜、しかも真夜中である。この詩において、夜の唯一の光である三日月がマリアを暗示するならば、それは同時にイエス・キリストをも暗示することになる。聖書には、夜中に『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした⁴⁹⁾とあり、キリストは真夜中に来るという話が書かれている。ここにおいてキリストの来臨、すなわち、救済の時が示されているのである。

・結論

詩の第一連は、太陽が運行しているものとして主観的に捉えられた現象を、死と復活の象徴であるとして、神話の原型イメージを提示した。第二連では、キリスト教の教義に言及する。死後に復活した魂が住む天国、及び、終末の時に到来する神の国について述べ、その王国の王子すなわちイエス・キリストは、父なる神であり、聖霊であるという三位一体の教義を示した。第三連は、魂の上昇、神の審判、救済を象徴によって表わした。まるで天地がカオス状態であるかのように、海に起こる恐るべき大渦巻が空に現われる。そして、私 が居る海には三日月がある。三日月は神の審判、及び聖母マリアを象徴すると考えられた。三日月が聖母マリアを象徴するとすれば、それは同時にイエス・キリストの出現をも象徴することになる。海の三日月は、キリストの来臨による救済の可能性と、自己をマリアと同一視する傾向のある詩人の希望をも暗示していると考えられることもできた。

『ヨハネの黙示録』に書かれていることは、預言者ヨハネが見た幻影であるとされている。ディキンソンのこの詩もまた、死後の魂に関して、彼女が見た幻影を提示しているのだと思われる。すなわち詩人は、復活、神の国、メシアの来臨、救済の可能性などを示唆することによって、彼女の黙示録を記したのである。しかし、現在の私自身は、永遠と不滅の間という中途半端な期間にあり、第二連の“they say”では私の懐疑心を覗かせた。ディキンソンの幻影を記した黙示録は、闇の中のペルソナにわずかではあるが光を残し、最後に神の大いなる力を強調して終わったのである。

【注】

- (1) Jack L. Capps, *Emily Dickinson's Reading 1836 - 1886* (Cambridge: Massachusetts, Harvard University Press, 1966) p.30.
- (2) Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (Princeton: Princeton University Press, 1973) p.136.
- (3) 新教出版社編『聖書辞典』p.337 (新教出版社 1994)
- (4) Ibid., p.384.

- (5) E. Miller Budick, *Emily Dickinson and the Life of Language: A Study in Symbolic Poetics* (Baton Rouge: Louisiana State University, 1985) p.202.
- (6) 『詩篇』第90篇9節 (日本聖書協会 1961)
- (7) Elizabeth Barrett Browning, *Aurora Leigh*. 30 March 2000 <http://di!gital.library.upenn.edu/women/barrett/aurora/aurora.html> First Book p.12.
- (8) 『ヨハネによる福音書』第1章4節 - 5節。
- (9) 『ヨハネの黙示録』第2章3節。
- (10) 『マタイによる福音書』第6章10節。
- (11) 『詩篇』第145篇13節。
- (12) Fordyce R. Bennett, *A Reference Guide to the Bible in Emily Dickinson' Poetry* (Lanham, Maryland: The Scarecrow Press Inc., 1997) p.20.
- (13) Craig M. Carver著 渡辺勝馬、小野祥子訳 『英米単語の歴史辞典』 p.186 (柏書房 1996)
- (14) Xavier Leon-Dufour編 Zenon Yelle翻訳監修 『聖書思想事典』 p.847 (三省堂 1999)
- (15) 柳宗玄、中森義宗編 『キリスト教美術図典』 p.364 (吉川弘文館 1990)
- (16) 『ヨハネによる福音書』第1章18節。
- (17) 『コリント人への第二の手紙』第4章4節。
- (18) 『マルコによる福音書』第1章10節。
- (19) 『使徒行伝』第2章3節。
- (20) 『出エジプト記』第13章21節。
- (21) Ibid.
- (22) Ibid., 第19章16節。
- (23) 『ヘブル人への手紙』第11章1節。
- (24) Thomas H. Johnson ed., *The Poems of Emily Dickinson*. (Harvard Univ. Press, 1965) No.342.
- (25) Ibid., No.1102.
- (26) Ibid., No.499.
- (27) Ibid., No.1017.
- (28) 『ヨハネによる福音書』第2章11節。
- (29) 『詩篇』第106篇21節。
- (30) Thomas Paine著 渋谷一郎監訳 『理性の時代』 p.103 (泰流社 1981)
- (31) Ibid., p.105.
- (32) 『ヨハネの黙示録』第12章1節。
- (33) 矢崎美盛著 『アヴェ・マリア マリアの美術』 p.13 (岩波書店 1983)
- (34) Ibid., p.167.
- (35) Elizabeth Barrett Browning, *Aurora Leigh*. 30 March 2000 <http://di!gital.library.upenn.edu/women/barrett/aurora/aurora.html> Seventh Book p.22.
- (36) 『ヨハネの黙示録』第14章16節。
- (37) Ibid., 第14章19節。

エミリー・ディキンソンの詩「私の後ろに永遠が沈む」 (嶋田美恵子)

- (38) Ibid., 第14章20節。
(39) Ibid., 第19章13節。
(40) Ibid., 第19章15節。
(41) Thomas H. Johnson, ed., *The Letters of Emily Dickinson*. (Harvard University Press, 1986) No.622.
(42) Jack L. Capps, *Emily Dickinson's Reading 1836 - 1886* (Cambridge: Massachusetts, Harvard University Press, 1966) p.120.
(43) Judith Farr, *The Passion of Emily Dickinson* (Cambridge: Massachusetts, Harvard University Press, 1992) p.312.
(44) Northrop Frye著 伊藤誓訳『大いなる体系：聖書と文学』p.228 (法政大学出版局 1995)
(45) Manfred Lurker著 竹内章訳『象徴としての円』p.103 (法政大学出版局 1991)
(46) Ibid., p.104.
(47) 矢内原忠雄著『聖書講義 黙示録(ダニエル書 ヨハネ黙示録)黙示録研究』pp.518-519 (岩波書店 1978)
(48) 『列王紀下』第2章11節。
(49) 『マタイによる福音書』第25章6節。

(しまだ みえこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導教授：萱嶋 八郎教授)

2002年10月16日受理